

# 箕面の古墳

1991年3月

箕面市教育委員会

## はしがき

箕面市は、「明治の森箕面国定公園」に代表される豊かな自然と、国や府の指定を受けた数多くの文化財に恵まれた町であります。

しかし、豊かな緑と、田園風景が残されている本市にも開発の波は押し寄せ、急速な都市化が進んできており、文化財がおかれている環境も著しく変化しています。

文化財は、現在に生きるわたしたちの生活と切り離して考えることができないものであるとともに、後世に伝え残さなければならないものです。

本書は6～7世紀頃に、本市に築かれた古墳に関する概要報告書です。本書が、わたしたちの郷土箕面の古代を学習するための一助となり、文化財保護に役立つことができれば幸いに存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位と、古墳の保護と管理に多大なご協力を賜っております所有者の皆様方に心から感謝するとともに、今後とも文化財保護に関しましてより一層のご理解、ご協力をお願いいたします。

平成3年3月

箕面市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は箕面市に所在または、所在していた古墳に関する概要報告書である。
- 2 中尾塚古墳については、1970年2月22日より同年3月10日まで発掘調査が実施されている。
- 3 本書の作成にあたり、「中尾塚古墳概要報告書 1970 箕面市教育委員会」、「ましかね考古3 1990 大阪大学考古学研究会」、「箕面市史第1巻 1966」から、一部内容を転載した。
- 4 本書の作成については、箕面市教育委員会生涯学習推進課が進行させ、遺物実測図の作成及びトレースについては、青木勘時（天理市教育委員会）、小池香津江、伊藤恵理子、前田雪恵（以上、奈良大学）佐々木純（花園大学）が行い、遺物原稿は青木、小池が執筆した。
- 5 本書の作成にあたってご協力・ご指導いただいた関係各位、並びに古墳の保護にご理解をいただいております所有者の皆様方に記して感謝の意を表します。

## 目 次

位置と環境	1
中尾塚古墳	3
新稲古墳	9
桜古墳	13
鬘切塚古墳	16
稲荷社古墳	17
遺物観察表	18

### 挿図リスト

第1図	箕面市位置図	1
第2図	古墳分布地図	2
第3図	中尾塚古墳石室実測図	4
第4図	中尾塚古墳遺物実測図	8
第5図	新稲古墳遺物実測図	10
第6図	新稲古墳墳丘測量図	11
第7図	新稲古墳石室実測図	12
第8図	桜古墳石室(写真)	13
第9図	桜古墳石室実測図	14
第10図	桜古墳絵図	15
第11図	鬘切塚古墳提瓶実測図	16
第12図	稲荷社古墳墳丘(写真)	17

### 図版リスト

図版1	中尾塚古墳調査状況
図版2	新稲古墳現況

## 位置と環境

大阪府の北部に位置する箕面市は、市域の北側約3分の2を北摂山地に占められている。山地は余野川・箕面川・勝尾寺川の一級河川により侵食を受け険しい谷が刻まれている。また市域の南側には千里丘陵があり、山地と丘陵との間に幅1.5Km～2.0kmの、山麓急斜面、台地及び台地を開析する浅い谷底平地からなる低地帯が東西に細長く延びている。

箕面市の歴史の始まりは古く、旧石器が採集されているのを始め、瀬川・稲・白鳥・新稲等の地域からは縄文時代の土器・石器等が発見されて

おり、如意谷の山中からは弥生時代の銅鐸が出土している。古墳時代になると箕面地区には集落が営まれ、市域の西部を流れる箕面川の右岸と、その支流である石澄川にはさまれた丘陵上には、古墳が築かれるようになる。現在、石室等の遺構が残されているのは4基だけであるが、古墳が分布している丘陵は古くから植木畑として開墾されたり、住宅地として開発されているため、今日残されているもの以外にも数多くの古墳が存在していたと考えられている。

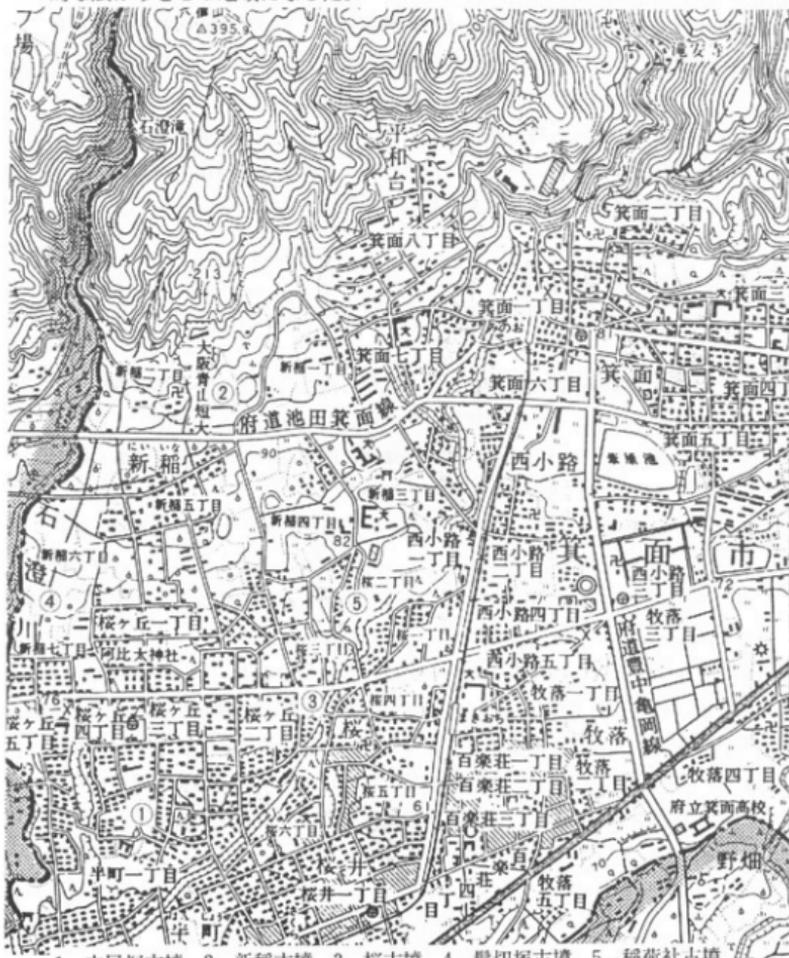
周辺地域の古墳時代の遺跡に目を転じてみると、前期古墳としては、池田市の五月山丘陵に池田茶白山古墳・娯三堂古墳、豊中市の千里丘陵に待兼山古墳が立地しており、中期になると豊中台地には北摂最大の桜塚古墳群が形成され



第1図 箕面市位置図

ようになり、千里丘陵の桜井谷では須恵器の生産が始まる。後期になると池田市内には、府下最大級の横穴式石室を持つ鉢塚古墳が出現する。

古代末から中世になると、箕面市域には密教寺院である箕面寺（瀧安寺）や勝尾寺が開基され、阿比太神社や為那都比古神社等の延喜式内社も奉祀された。また、山陽道の発達にともない、草野駅や豊島牧が設置されるなど、より歴史的な広がりをもつ地域になった。



1. 中尾塚古墳 2. 新船古墳 3. 桜ヶ丘古墳 4. 髪切塚古墳 5. 稲荷社古墳

第2図 古墳分布図

## 中尾塚古墳

はじめに

中尾塚古墳が立地する桜ヶ丘地域は、古くから住宅地として開発されていたが、古墳が所在する場所は叢林として残されていた。ところが昭和45年、この叢林が住宅地として開発されることになり、箕面市教育委員会では工事に先立って発掘調査を実施した。調査は、鳥越憲三郎先生（当時大阪教育大学助教授）の指導のもとに、現場担当者として島田義明氏（当時豊中市教育委員会職員）があたり、大阪商業大学考古学研究会の学生諸君の参加を得て行われた。

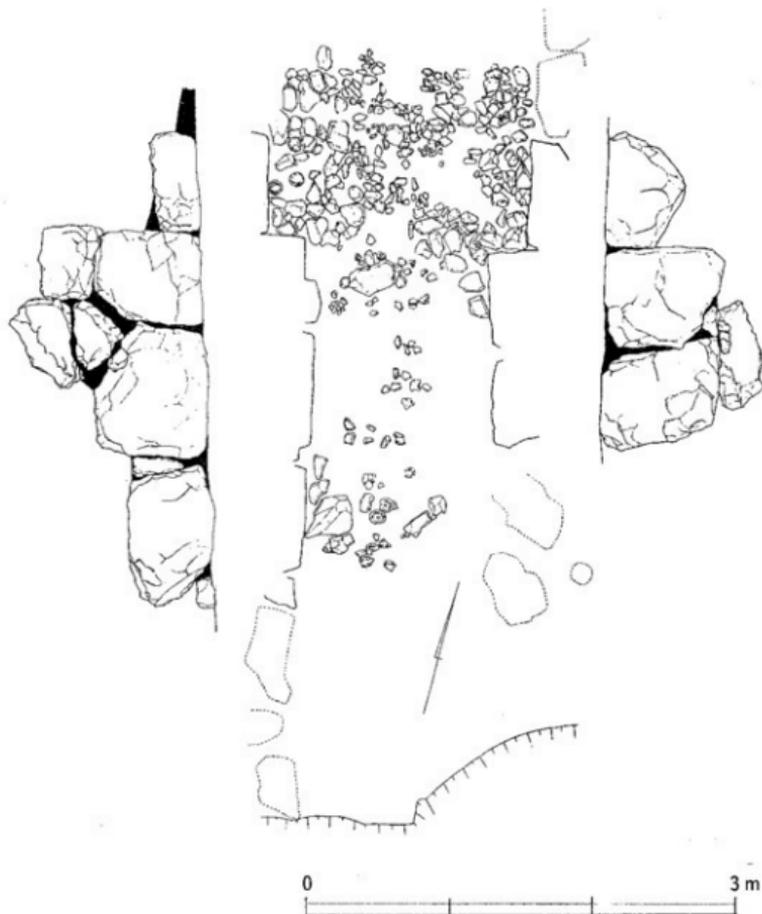
調査の概略が中尾塚古墳発掘調査概要報告書（箕面市教育委員会1970）にまとめられているので、以下に同書の内容を転載する。（出土遺物の詳細については未報告であるので、本書で追加して報告する。）

### 調査の概要

中尾塚古墳の発掘は昭和45年2月22日より3月10日までの17日間にわたって行った。

調査当初の古墳の周囲は叢林をなし、北から南に延びる丘陵の突端部に長さ2.5m、幅2.0mの巨石が露出しており、これが天井石の一部であることが考えられた。墳丘については、周辺が畑地に開墾されており、土が取り除かれているためほとんど認められず全壊していた。

残存する天井石は約0.5m東に移動し、石室内に残るわずかな地積土によって安定しているため、それを撤去してから調査することとし、まず石室の残存部の確認を行った。調査進行にともない、天井石の残存する部分が羨道部分であり、玄室については一部を除いて全壊していることが明らかになった。玄室部分で確認できたのは羨道部分から両袖をもって長さ1.6mの範囲で、この部分では敷石も認められた。天井石撤去後、羨道部分の調査を行ったが、玄室部分と同じく、かなりの損傷を受けており、その全長は不明である。しかし両側壁の痕跡を8ヵ所で確認し、この部分においてかなりの遺物も出土したことから、本古墳の主体部についてはその性格を推定しうる資料を得た。



第3図 中尾塚古墳石室実測図

## 規模と構造

中尾塚古墳の墳丘は、東西北の三面が畑地開墾でほとんど削平されており、南面すなわち開口方向についてもかなりの掘削を受けており、約0.5mの落ち込みとなっている。したがって10本のトレンチを設定し、その形態究明に全力を注いだ。やはり畑地開墾のため、その規模について明解な資料が得られなかった。東西に抜いたトレンチの側壁横で主体部構築のための掘り方を検出した。これによると石室西側では構築に際して、地表から約0.3mの掘込みを造り、側壁安定のために粘土を詰めていることがわかった。しかも同じ位置の東側のトレンチでは掘り方が認められないので石室構築には、若干の傾斜を修正する程度の作業を行い、ほとんどは地表面に石室を構築していたものと考えられる。

石室の残存する部分は側壁痕跡も含めて全長5.7mをはかり、このうち玄室部は1.6m、羨道部は4.1mで、石室の本来の規模は不明である。またこの幅については、羨道部で1.25m、玄室部で1.80mとなっており、この変わり目で両側に0.27mの袖をもつものであった。石室の高さについては、天井石を一枚残しているが、これも側壁を抜かれた状態であるので不明である。

石室を構築している石材は、ほとんどが地元で「能勢石」と呼ばれている花崗岩であるが、天井石については質を異にしており、箕面山系に産するものと考えられる。

石室の構築状態は、羨道部において最高4段を数えられるが、玄室部分では最下段の石を両側に1個づつ残すのみであった。いずれも上部については不明であるが、残存する部分においてはほとんど垂直の状態にあり、内部にせりだした状態は認められない。また構築の特徴として多くの古墳でみられるように最下段の石を建てて使用し、2段目以上については内側を合わせて横積みしていることが認められた。

残存する石室の玄室部分において、種々雑多な径10cm前後の石を不自然に敷いた敷石を検出したが、これは羨道部にはなく、明らかに羨道部と玄室部を区別していることがわかる。

## 石室内部の状態

調査前の石室内部の状態は、側壁上段まで土砂が堆積しており、この土砂による攪乱の中から遺物が出土した。上部では土釜や瓦器などの中世に属する遺物が出土した。玄室内部の床面敷石上では、両側壁に接して須恵器杯など、中央部で土師器、金属製品としては金環・鉄釘などを出土した。また羨道部内においては床面ぎりぎりまで瓦器の出土を認め、これにともなって一面の焼土が認められた。床面からは、これも攪乱を受けていると考えられる杯蓋および身のまとまったものを数点、また長頸壺や高杯の破片、用途不明の鉄製品1点が出土した。

## 出土遺物（第7図）

### 須恵器杯蓋（1～6）

天井部のつまみと、内面の返りを持つものと持たないものがあり、前者はさらにつまみの形態により二種以上に大別できる。

天井部のつまみと内面の返りを持たないもの（1）は、丸みを帯びた天井部を有し、約1/2の範囲に回転ヘラ削りを行う。（2）は、扁平で中央が突出したつまみを持つものである。内面の返りは長く、その端部は口縁端部よりも下位となる。天井部は丸く、約1/3に回転ヘラ削りを施し、体部から口縁部にかけては回転ナデで仕上げる。内面の中央にはナデ調整がみられる。（3～6）はつまみの断面が菱形に近い形態を呈するものである。（3）は、天井部が平らで全体に扁平である。内面の返りは口縁端部からつながって断面が大きな三角形となり、端部の高さは口縁端部とほぼ同じである。天井部に回転ヘラ削りが見られる。（4・5）はつまみがやや丸みを帯びた菱形で、全体に丸い形態のものである。内面の返りは短く、端部は口縁端部よりも上位となる。天井部の約1/2以上に回転ヘラ削りを行うが、（5）では一部回転ヘラ削りの後、回転ナデで仕上げている。（6）はつまみの接合部分のくびれが明瞭でない。器高が高く、やや丸みを帯びた形態を呈する。内面の返りは極めて短く尖らせる。天井部の回転ヘラ削りの範囲は狭く、内面中央にはナデ調整が見られ

る。

#### 須恵器杯身(7~12)

立ち上がりの有無によって二種に分けられる。

立ち上がりを持つもの(7~9)は、体部が丸く扁平で、短く内傾する立ち上がりを有する。口縁端部及び受部端部はいずれも丸く納める。底部の約1/3は回転ヘラ削りを施されるが、(7)は特にその範囲が狭い。(10~12)は底部が平らで口縁部が直立気味に外へ向かって伸びるものであるが、底部と口縁部との稜は明らかでなく丸みを帯びている。(10)は、焼きひずみによるゆがみが大きいものの、形態的には(11・12)と同種のものと思われる。底部に回転ヘラ削りを、口縁部に回転ナデを施す。

#### 須恵器鉢(13)

ラッパ状に外反するやや長い口頸部と扁平な球体形の体部を持つ。口径は体部径をしのぐ。口縁端部は外側に面を持ち、口頸部の中位に沈線を二条めぐらす。文様帯は見られない。体部最大形に沈線をめぐらし、その下位に円形に穿孔する。体部下半に回転カキ目を施し、底部にはヘラ記号がある。

#### 須恵器高杯(図14)

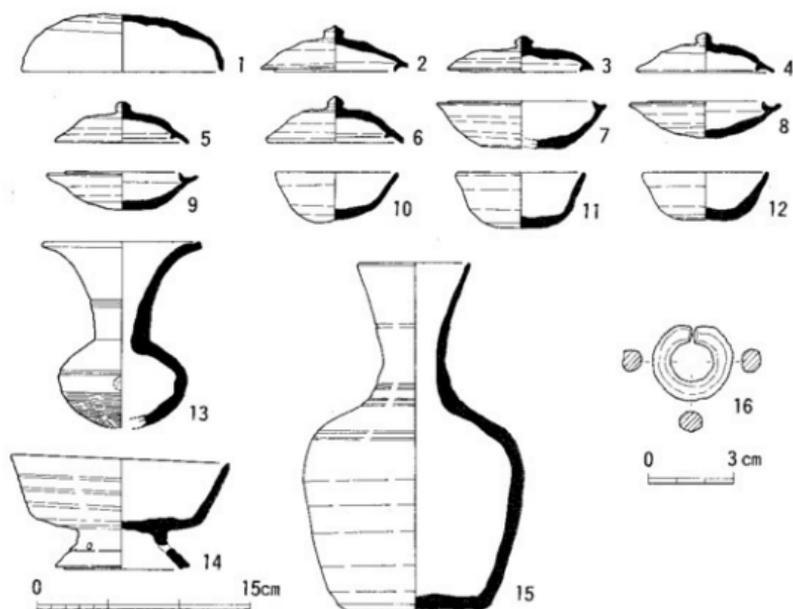
底部が平らで口縁部が直線的に立ち上がる杯部に、短い脚部を持つ。杯部に沈線を三条めぐらし、口縁端部を丸く納める。脚部はハの字状に取り付き、外反したのち内彎する。端部は面を持ち、内端面が接地する。杯部底部に回転ヘラ削りを施す。

#### 須恵器壺(15)

外反する長い口頸部と、やや肩の張った平底の体部を持つ。口頸部は器厚が薄く、端部は丸く納める。底部端を回転ヘラ削りによって面を取り、その内端が接地する。口頸部の中位から肩部かけて浅い沈線が見られる。体部下半は回転ヘラ削りの後、回転ナデを行う。底部外面にロクロのゲタ痕が残る。焼きぶくれ、ひずみが見られ、別個体の付着、自然釉の降着が認められる。

#### 耳環(16)

鉄地金銅張りの耳環である。全体に錆化が著しく黄褐色のサビが付着するため、保存状態は悪い。径2.6~2.8cmを測り、断面は径0.6~0.8cmの楕円形を呈する。



第4図 中尾塚古墳遺物実測図

#### あとがき

中尾塚古墳は発掘調査により、両袖式の横穴式石室を主体部とする後期古墳であることが判明した。発掘調査当時は7世紀前半の築造と考えられていたが、遺物整理を進めていく中で、6世紀後半の遺物も含まれていることが判明した。このことから、当古墳は6世紀後半に築造された後、7世紀代まで幾度かの追葬が行われたものであると推測される。

現在、中尾塚古墳は土地所有者の好意により、住宅の庭の中に石室の一部が保存されている。

## 新稲古墳

### 概要

新稲2丁目の六個山山麓に立地する。横穴式石室を持つ円墳であるが、近世以降の植木畑の開墾と風雨等の自然侵食のため墳丘の破損が著しく、羨道と石室の上半部が露出している。石室は古くから開口しており盗掘を受けているようであるが、幸いにも玄室内から若干の土器と耳環2点が採集されている。

今日まで発掘調査は行われていないが、平成元年に大阪大学考古学研究会による測量調査が実施され、調査結果が報告されているので(まちかね考古3・1990)以下同書の測量図にもとづき概略を記す。

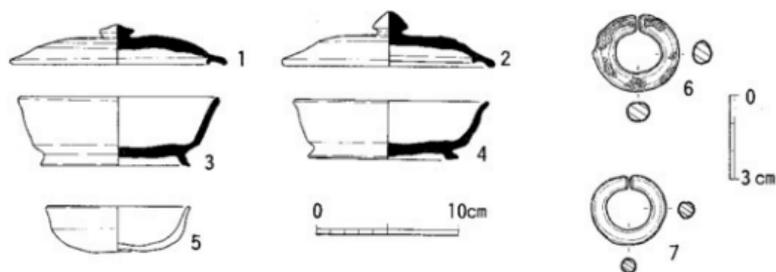
墳丘の規模は削平及び流失により明確ではなく、従来は10～15m程度の円墳であると考えられていたが、測量の結果、20mを超える可能性があることが判明した。主体部は両袖式の横穴式石室で、全長7.76mを測る。玄室は奥壁の上半部の石が消失しているものの、比較的旧状を留めている。長さ3.50m、幅は奥壁側で1.62m、入口側で1.77mを測る。高さは、床面に若干の堆積土があるため明確ではないが、現状では最高部で2.40m、最低部で1.80mである。天井石は奥壁側で失われているが、4枚が現存している。羨道は長さ4.26m、幅1.05mを測る。天井石はすでに取り除かれているが、1～3段の壁石が残されている。

(墳丘測量図及び石室実測図は「まちかね考古3」より転載した)

### 出土遺物(第5図)

#### 須恵器杯蓋(1・2)

天井部中央につまみを有し、内面に返りを持つが、つまみの形態により二種が存在する。(1)は大型で天井部はやや丸みを帯びる。つまみは径が大きく扁平で中央が突出する。内面の返りは短く尖り、その高さは口縁端部とほぼ同じである。(2)は天井部が平らで全体に扁平である。つまみは高く断面は菱形でいわゆる宝珠形である。内面の返りは極めて短く断面が三角形で端部は口縁端部よりも高い。(1・2)ともに天井部に回転ヘラ削りを、内面中央にナ



第5図 新稲古墳遺物実測図

子調整を施す。

#### 須恵器杯身（3・4）

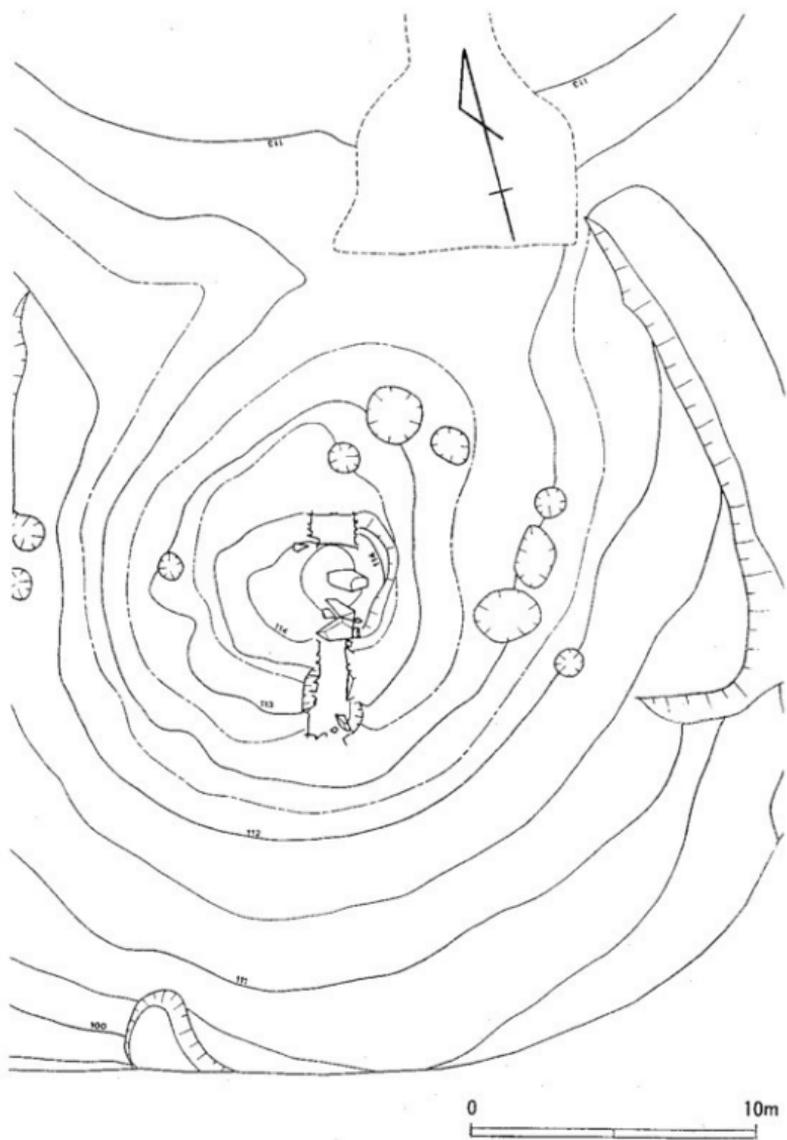
幅の広い、比較的高めの高台がハの字状に付く。体部は平らな底部と外方にほぼ直線的に延びる口縁部を持つ。（4）は口縁部がわずかに外反する。高台から底部にかけて回転ヘラ削りを施す。

#### 土師器杯（5）

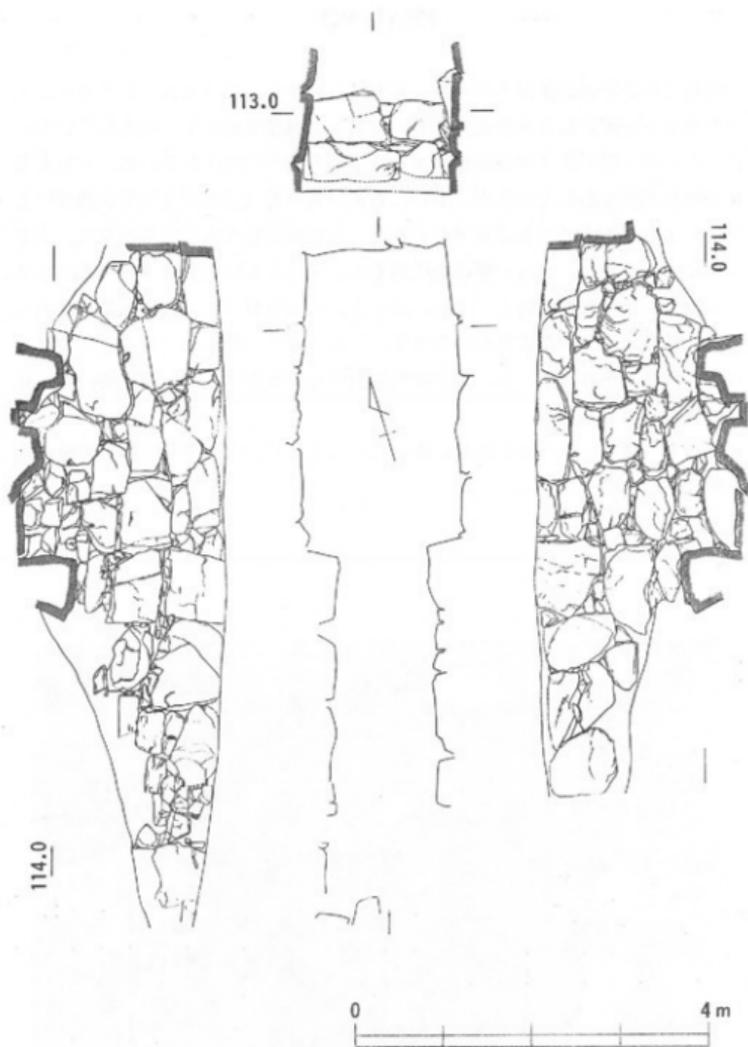
やや丸みを帯びた底部を持ち、口縁部は斜め上方に延び、端部を丸くおさめる。口縁部はヨコナデで仕上げるが、全体に磨滅が著しく調整の観察は困難である。胎土は精良である。

#### 耳環（6・7）

（6）は金銅張りの銅環である。錆化が著しく、依存状態は極めて悪い。表面には虫食い状に凸凹が見られ、緑青が認められるが、部分的に金銅張りが残る。径3.0cm、断面径0.6cm。（7）はやや小型の金環である。良好な依存状態を呈し、鈍い黄金色の輝きを持つ。径2.4～2.6cm、断面は正円形に近く、径0.5～0.6cmを測る。



第6圖 新稻古墳墳丘測量圖



第7図 新稲古墳石室実測図

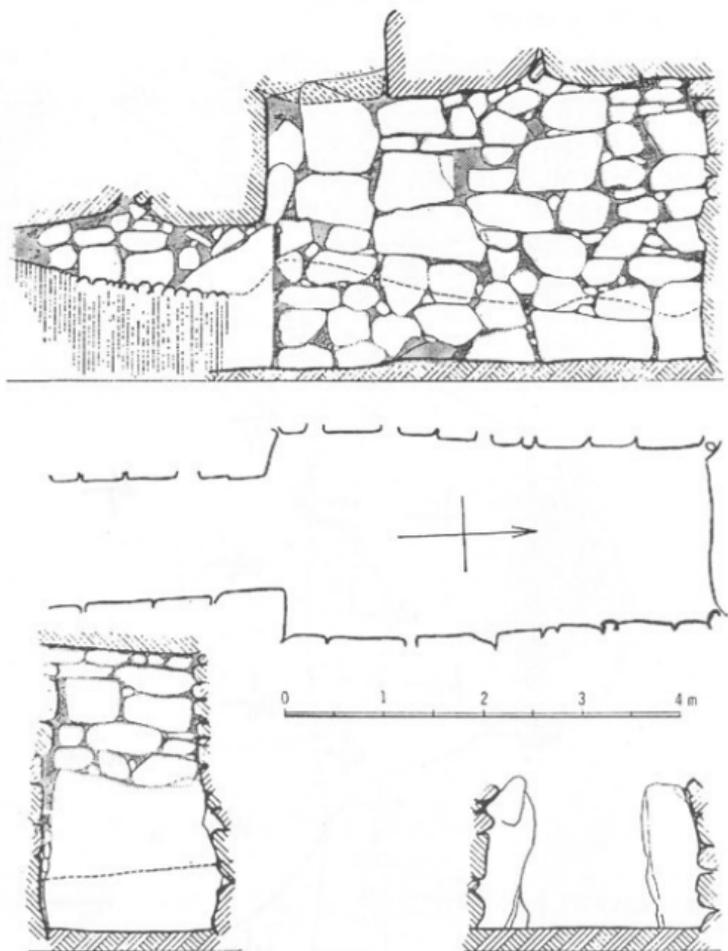
## 桜古墳

明治5年大阪の造幣局の技師として来日していたイギリス人、ウィリアム・ゴウランドが調査した古墳として著名である。現在墳丘は全く残されていないが、石室の一部が所有者の好意により、住宅の庭内に残されている。石室も著しく原形が損なわれているが、幸いにも笹川隆平氏（元本市文化財保護専門委員）によって作成された測量図によると、石室は両袖式の横穴式石室で、玄室の規模は、長さ4.5m、幅は奥壁際で1.7m、入口で2.1m、高さは2.5m以上、また羨道は幅1.4m、高さ1.5mを測り、3枚の天井石があったことがわかる。奥壁の底石は高さ1.5m、幅1.8mの一石で、2段目からは自然石を並べている。6世紀後半頃のものと考えられる須恵器の有蓋高杯の身が出土している。

また本古墳の往時の姿を記録に残したものとして、明治初期頃作成の桜村水利組合所有の絵図がある。



第8図 桜古墳石室



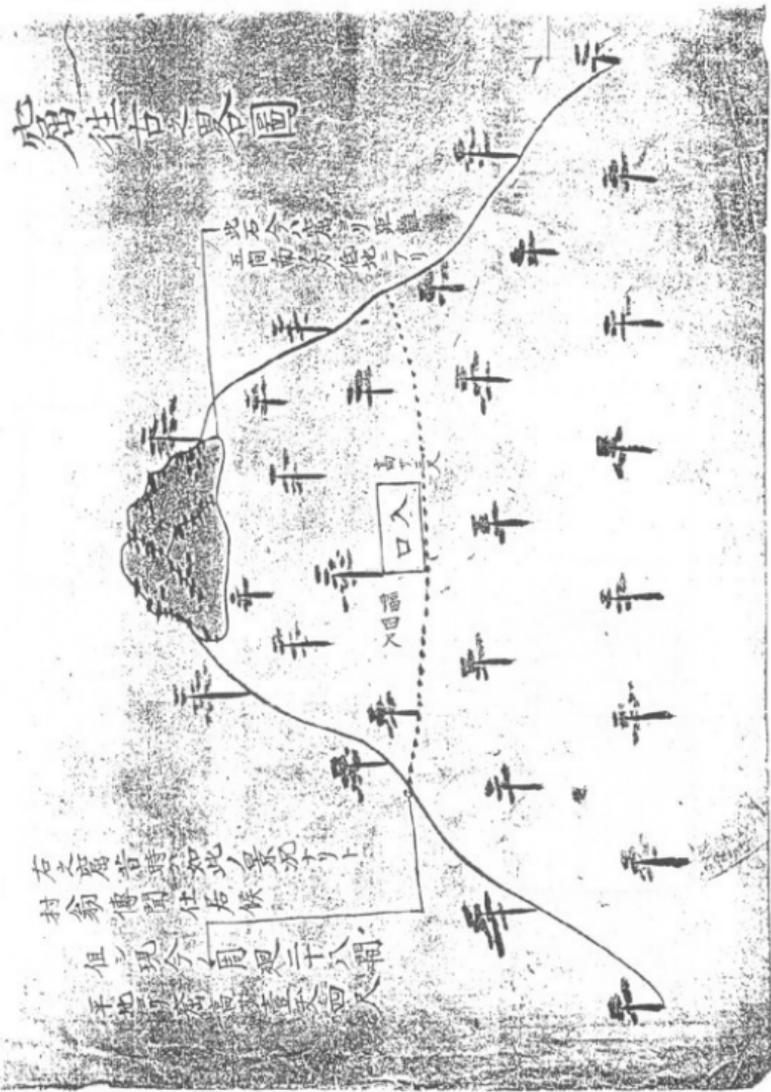
(上)側面図 (中)平面図  
(下左)奥壁部 (下右)袖石

— 箕面市史第1巻より転載 —

第9図 桜古墳石室実測図

第10图 柘古墳群图

窟往古之畧圖

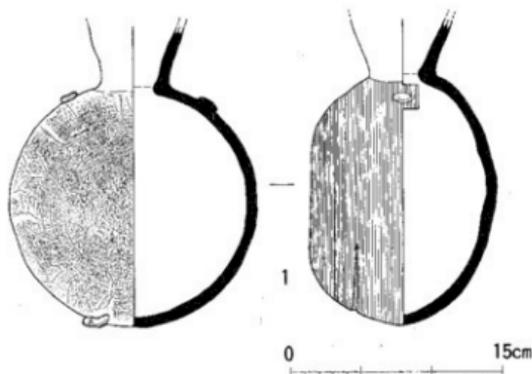


## 髪切塚古墳

現在まったく古墳の痕跡を残していないが、数年前、住宅の工事中に須恵器提瓶がほぼ完形の状態で出土したことや、その場所の字名が「髪切塚」であることから、過去に古墳が存在していたと推定される。

箕面市内から西側の池田市にかけての丘陵地は、古くから畑地や住宅地として開発されており、その際に記録に残されず削平された古墳も、本墳以外に数多くあると考えられる。

出土した提瓶(第11図-1)は、扁平な球体形の体部に、ほぼ直線的に上方外に伸びる口頸部の左右にボタン状の突起を貼り付け、体部に回転カキ目を施す。口縁を欠くもののほぼ完形である。底部には別個体の付着が見られる。外面全体に灰降着が見られる。



第11図 髪切塚古墳提瓶実測図

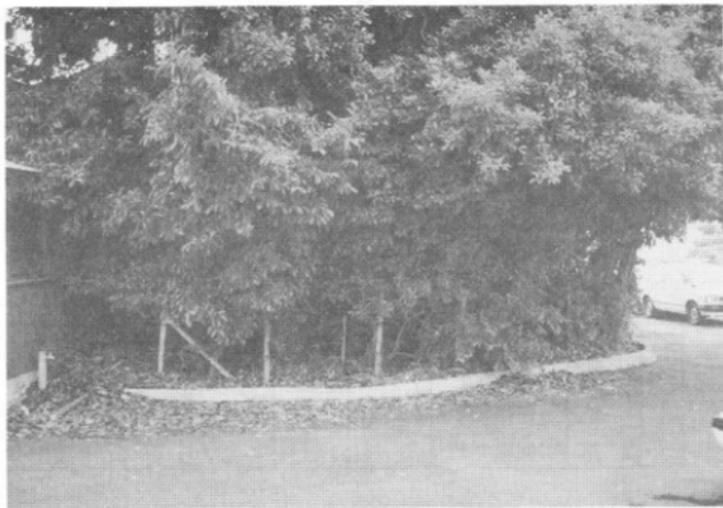
### 遺物観察表

番号	器種	調整方法	色調	胎土	焼成	法量(cm)	備考
1	須恵器 提瓶	外)回転ナデ 回転カキメ 内)回転ナデ	暗青灰色	密	良好	現存高21.5	灰降着 底部に別 個体付着

## 稲荷社古墳

桜2丁目の正丸稲荷神社の境内に所在する、横穴式石室を有する円墳である。立地場所は、箕面山系から南に延びる、海拔75m付近の丘陵地帯の緩やかな傾斜地で、東側で谷となって箕面川に向かって落ちこむ。箕面市内では最も墳丘の原形を残す古墳であるが、未調査のため、遺物・遺構については明確ではない。

羨道部にあたりと考えられる位置に社殿が建てられているため、羨道部は消滅している。玄室部は残されており、内部に神社の御神体が安置されている。玄室内には土砂が堆積しているため、その下にはなんらかの遺物が残されていることが考えられる。築造の時期は不明であるが、同じ丘陵上の南側約400mに所在する桜古墳と同時期頃、概ね6世紀後半～7世紀前半の築造と推測される。



稲荷社古墳墳丘

図 版



桜古墳出土高杯



全 景 (南より)



床面敷石検出状況



全 景



石 室

遺物観察表

中尾塚古墳

番号	器種	調整方法	胎土	焼成	法量 (cm)	備考
1	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密 細砂含む	良好	口径 13.8 器高 4.0	約2/3残存
2	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 8.4 器高 3.0	約2/3残存
3	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 8.0 器高 2.5	
4	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密 細砂含む	良好	口径 8.0 器高 3.8	外面灰降着
5	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密、黒色 粒含む	良好	口径 9.2 器高 2.9	外面灰降着
6	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 9.6 器高 3.3	
7	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 10.0 器高 3.3	口縁の一部を欠く がほぼ完形
8	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密、小石 細砂含む	良好	口径 8.0 器高 2.5	
9	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密、小石 細砂含む	良好	口径 8.0 器高 2.7	
10	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密、黒色 粒含む	良好 堅致	口径 8.4 器高 3.6	巻き上げ痕明瞭
11	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	やや良好	口径 8.6 器高 3.8	約1/2残存 巻き上げ痕明瞭
12	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 8.8 器高 3.4	口縁の一部を欠く
13	須恵器	外)回転ナデ 内)回転ナデ	密、細砂 含む	良好	口径 10.8 器高 13.0	約2/3残存
14	須恵器 高杯	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密、小石 含む	良好	口径 14.9 器高 7.9 底径 7.5	
15	須恵器 壺	外)回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 7.8 器高 24.2 底径 9.2	約1/2残存
16	耳環				最大径 2.8 内径 1.5 断面径 0.6-0.8	鉄地金剛張り

新稲古墳

番号	器種	調整方法	胎土	焼成	法量 (cm)	備考
1	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 15.6 器高 2.8	
2	須恵器 杯蓋	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密 小石細砂 多く含む	良好	口径 9.8 器高 3.2	約1/2残存
3	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 13.6 器高 4.8	約2/3残存
4	須恵器 杯身	外)回転ヘラ削り、回転ナデ 内)回転ナデ、ナデ	密	良好	口径 13.5 器高 4.1	
5	土師器 杯	外)ヨコナデ 内)ヨコナデ	密 精良	良好	口径 9.8 器高 3.2	
6	耳環				最大径 3.0 内径 1.6 断面径 0.8	銅製、金剛張り
7	耳環				最大径 2.6 内径 1.6 断面径 0.6	金製?

1991年3月31日発行

「箕面の古墳」

編集・発行 箕面市教育委員会

印刷 大谷印刷株式会社

印刷物番号

2-37

